

戦時下の土浦中学生6～第2次大戦下の土中43回卒業生～

中43回生は、1939(昭和14)年4月に入学、1944年3月の卒業、と、まさに戦時下での学校生活を余儀なくされました。その中43回の斉藤彰夫氏から、5年間の学校生活を記した玉稿「第2次大戦下の土中43回卒業生」を頂戴しましたので、掲載させていただきます。

文中の【 】内は編集者による注記です。

第2次大戦下の土中43回卒業生

旧制茨城県立土浦中学校第43回卒業生は、昭和14(1939)年4月に入学した。当時は、日支(日中)戦争の真只中。日本は英米とは一触即発の緊張状態が続いていた時で、日本の輸入生命線である西太平洋海域は、米・英・支・蘭の封鎖作戦により、いわゆるABCラインが設けられて、海外輸入航路は閉ざされ、国民の生活は極度に窮迫していた時代であった。

昭和16年12月8日朝、我々3年生の時に太平洋戦争が勃発した。多感な年頃で、次々と大本営から発表されてくる緒戦の戦果に、ルーズベルト(米大統領)はベルトが外れて回転不能になった、などと教室で万歳を三唱し、志気は嫌が上にも高揚していた。

その様な状況の中ではあったが、第43回卒業生は、軍国主義一色の中で、今では想像もつかぬ、5年間の戦時下での中等教育を受け(実質は4年間位の学業か?)、とにかく昭和19(1944)年3月に卒業した。

学校での生活

土浦中学は、明治30(1897)年4月開校の県下有数の進学校であった。1学年のクラスは、甲・乙・丙組の3組で、生徒数は150名。座席は、各教室とも、教壇から遠い最後列から順次成績順に決められた。教科・科目は、戦時中とはいえず、中等教育の基本は守られていたと思う。敵国語である英語関連にしても、特別差別されることは無かった様な気がする。その様な基本科目のほかに、当時特異なものとしては、軍事教練が週2時間あつ

た。そのほか柔道か剣道いずれか選択の武道が週1時間必修としてあつた。

制服の上着は、海軍式の背を丸く縫いあげた詰襟服で、冬は小倉地、夏は霜降り地であつた。編み上げ靴を履き、巻脚絆を巻いて登校した。

校舎は明治37(1904)年竣工のモダンな建築で、後年、国の重要文化財に指定された。教室や廊下の床には油が塗ってあり、靴を履いたまま教室に入ることができた。当時の公立中学校には、正規の教員のほか陸軍からの配属将校がいた。

校門を入って20～30メートルほど先の、校舎正面玄関に向かって左側に、鬱蒼と茂る樹林に囲まれて、天皇陛下のご真影を祀る「奉安殿」がある。登校した教員・生徒らはすべてそこで最敬礼をして教室に入る。四方拝・紀元節・天長節・明治節の四大節の際には、式の始まる前に宗光奎太郎校長と陸軍の配属将校金澤信安中尉が、奉安殿を開けてご真影を捧持し、講堂正面の祭壇に移す。式終了後は再び「奉安殿」に戻す。まさに、「天皇は神聖にして冒すべからず」。

なお、本校生徒は学校の内外を問わず、教員や上級生に遭った時には挙手の敬礼をもって挨拶することになっていた。学校の授業は午前4時間、午後2時間の1日6時間制で、土曜日は午前の授業のみであった。勿論、学校給食などは無い。弁当持参だ。5年次の修学旅行も無い【昭和17年の聖地巡拝旅行を最後に実施されなくなりました】。体育部は戦時下でもあつたし、余り活発ではなかった。そんな中でも水泳部と柔道部、剣道部は県南大会で優勝した。県の柔道大会

には武道科の仲田寛師範に引率されて、小生も水戸の武徳殿での茨城県中等学校柔道選手権大会に出場した。代表選手は、先鋒中山友次郎、中堅小生、大将沼野開禧の3人だ。戦時特例で畳の上ではなく、野外の芝生の上での試合だった。足がスムーズに進まない、ということもあつて、決勝戦で鉾田中学に敗れた。水泳部は平泳ぎの関澤保治、自由形の藤井正巳、小室喜一らが活躍して県大会に出場した。陸上競技部、野球部、庭球部も比較的活発ではあったが、とにかくそんなことをしておられるような環境ではなかった。

我々中学生は、当時、まず海軍の甲種飛行予科練習生か陸軍の特別甲種幹部候補生に志願することを勧められた。どのような経緯か定かでないが、小生は広瀬真君や小野皓三君、原田千之君ら数名の仲間と勤労動員で土浦海軍航空隊適性部に行った。適性課と研究課があり、小生は適性課で主として第14期甲種海軍飛行予科練習生の採用試験に携わった【土浦中学からは、本紙第76号で紹介した戸張礼記氏をはじめ、中45回生約10名が合格・入隊しています】。

田中B式知能検査やクレッペリン精神作業検査の試験官補佐として、試験用紙の配付から試験要領の説明、採点まで任された。器具を使つての適性検査では、協応動作作業検査、速度調整検査、図形再生検査、処置判断検査、操縦演習機検査などの、操縦士としての適性判断の検査、採点に携わった。この時の受験者・第14期甲種飛行予科練習生は、幸いにも戦地には行かず、殆どが復員した。適

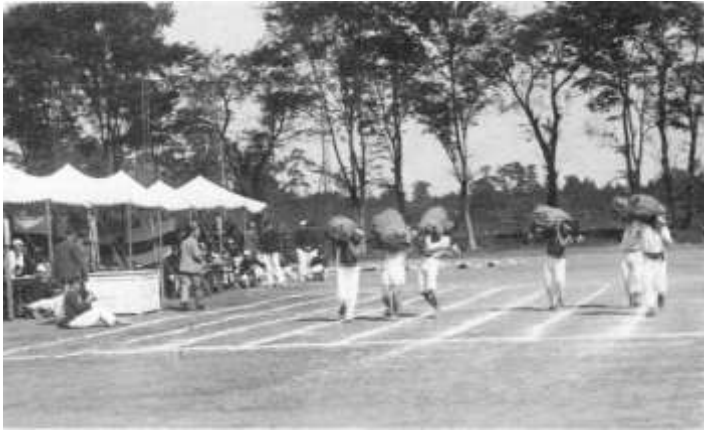


中43回(昭和19年3月卒)5年甲組「柔道部」仲間と(正面玄関前で)

性部の上司は、大学で心理学を専攻した予備学生出身の将校であった。

土中に学中に通常の科目のほか特に課せられた事。

①体力テストⅡ鉄棒での懸垂、砲丸投げ、2千メートル走、米俵を担いで50メートルを走る俵担ぎ走、走幅跳など。それらの総合記録により、初・中・上級の3階級に分けられ、バッジを貰って詰め襟に付けていた。



「体育錬成大会」(陸上運動会)における「俵担ぎ走」
(昭和17年3月卒『中41回アルバム』より)

②軍事演習(聯合演習)Ⅱ中学校の各校が完全武装で紅白に分かれての戦闘演習。5年時の2日間、不眠不休で索敵行軍し、早曉敵に遭遇して、「突撃」白兵戦を行うというもの。終わって最後に馬上の現役将校から講評を聞き、それぞれが母校に引き揚げた。小生は軽機関銃手

であったため、その重さで上着の右肩は破れ、皮膚は赤く腫れあがるなど散々であった。

③海洋訓練Ⅱ5年生全員と小澤永次郎担任教師らが、夏休みの1週間、海軍の現役将校・下士官を教官に、千葉県安房郡鋸南町保田海岸の旅館に合宿して、海軍生活の一部を体験するというもので、水兵さん特有の白い作業衣を着て、起床ラッパから一日の訓練を始めた。寢床を片付けて、「兵舎離れ5分前」の号令で兵舎前に整列し、隊伍を組んで海岸に駆け足集合して朝の点呼を受ける。その海岸付近は防諜地域で、一般人は、原則立ち入り・撮影禁止になっていた。遙か海上を駆逐艦などが航行している。多分東北出身であろうか、教官の分隊長曰く「……いつ何時保田の海岸を巡洋艦何隻、駆逐艦何隻通った、云々などと云ったらコレダゾ、コレ。」と、手首を縛られる仕草をしていた。その東北弁のしゃべり方が可笑しくて何時までも我々の語り草となっていた。

点呼が終わると朝食前の日課が始まる。海軍体操・手旗信号訓練・軍歌演習など1時間ほどの訓練で兵舎(旅館)に戻り、待望の朝食を摂る。一日の訓練を終えるのが午後5時。入浴、食事をして、以後自由時間だ。午後9時巡検、消灯で就床。一応軍隊の日課に準拠していた。小生が陸軍に入った時、イ・ロ・ハ・ニの手旗信号は、砲兵初年兵の訓練日課になっていたが、この時は海洋訓練のおかげで余り苦勞しなかった。1週間の訓練を終えて土浦駅に帰っていた時、駅前広場で全員が肩を組んで

円陣を組み、覚え立ての海軍軍歌「如何に強風」四面海なる帝国を」などを高唱して、軍都土浦の人々の喝采を受けて解散した。

④対空監視Ⅱ5年生の時、土浦警察署屋上の夜間対空監視に出された。交替で勤務に就き、「左前方に爆音あり。」とか「鹿島灘の方向に爆撃機らしい敵機数機。」などと、逐一敵機飛来の状況を情報連絡室に報告するというような、単純お粗末な情報伝達業務であったが、当時はこれも御国のためと真面目に勤務した。なお、当時、日本の飛行機は殆ど飛んでなかった。

⑤馬事訓練Ⅱ日本の陸軍は機械化が遅れていた事もあり、明治の建軍時代から兵隊よりも軍馬を大事にしていたようだ。兵隊は1銭5厘(召集令状のハガキ代)だが、馬は100円とよく云われた。5年生の夏休みに実際に馬を扱う馬事訓練というのがあった。馬体の手入れ・乗馬・歩行練習など、現役騎兵軍人の指導の下で、1週間軍馬の扱い方についての訓練を受けた。最後に馬事教育訓練修了証が交付された。卒業翌年の昭和20年6月10日入営したのが近衛師団野戦重砲隊「輓馬部隊」であった。朝の作業に馬の手入れ・馬房の掃除・寝糞交換が日課としてあったが、中学での馬事訓練が大変役に立った。

戦局の悪化と日常生活

5年生(昭和18年)になると戦局は極度に悪化し、アッツ島守備隊は玉砕全滅し、南方のニューギニアなどでは食料・兵器などの物資の補給も無く孤立無援、マラリヤと飢餓で壊滅した。中34回の小生の兄・斉藤隆夫も河部隊の歩兵中隊長として北支から転戦し、東部ニューギニア・ソナム島で戦死した。すぐ上の中39回の兄・斉藤英夫は、弓部隊の機関銃中隊小隊長として、ビルマで「インパール作戦」などの大戦に参戦したが、やはり物資の補給は無く、マラリヤと飢餓で壊滅的打撃を受けたと聞く。更に米軍はサイパン島を攻略、フィリピンから沖繩に進攻してきた。国内では、残った婦女子による国土防衛隊が組織され、連日「撃ちてし止まん。」と竹槍訓練に駆り出された。夜になると黒い布で覆った電灯の下で、細々と芋粥などを啜って飢えを凌いでいた。食料事情は、勿論、極度に逼迫していた。「欲しがりません、勝つまでは。」と、家庭への配給の主食は、少量の、フスマ(小麦糠)入りのコッペパン、サツマイモ、小麦粉が殆どという有様だった。大学・専門学校の学生は、学徒出陣で学業半ば、特攻要員として徴兵された。明治神宮外苑で東条首相出席のもとに行われた、篠突く雨の中を角帽姿で銃を肩に行進する若き学徒の「悲壮な壮行会」は、正視に耐えなかった。その大部分の学徒兵は、特攻隊員として、敵艦に飛行機ごと突っ込み、或いは南方戦線で玉砕し、帰らぬ人となった。その学徒兵が出陣前に書き残した遺書・手記が、戦後、『きけ わだつみのこえ』として出版されたが、涙無しではとても読めない。こんなことが20世紀にはあったのだ、という事を我々には後世に正しく伝えていく責務があるのだろう。(中43回 斉藤彰夫)